

<随想>一方的に頂戴するばかり

著者	松本 昌次
雑誌名	日本文学誌要
巻	42
ページ	167-169
発行年	1990-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019606

一方的に頂戴するばかり

廣末保著『近松序説』が未来社から刊行されたのは、一九五七年四月である。従って廣末さんにわたしが初めて出会ったのは、その前年の秋ごろだったろう。すでに三十年余の歳月を距てる。未来社の編集部に入社して三年ほど、仕事についてはまだ駆け出しの上、近松の“チ”の字もロクに読んだことのない若い編集者が飛びこんで来たのだから、廣末さんは戸惑ったに違いない。しかしわたしの方はすっかり廣末さんの人柄と話に魅了され、本郷界隈にあった廣末さんの薄暗い間借りの一室にしげしげと足を運んだ。

戦争中のある種の不快な余塵から、いわゆる“国文学”を敬遠していたわたしは、当時、もっぱら戦後文学者の批評集を刊行することに力を注いでいた。その初仕事が、花田清輝著『アヴァンギャルド芸術』（一九五四年一〇月）であった。つづいて花田さんの『さちゅりこん』（一九五六年三月）も刊行したばかりだったから、当然の成りゆきで、廣末さんと会々と花田さんの話をし、花田さんに

松 本 昌 次

会々と廣末さんの話をするといった“往復運動”を、いつしかわたしは果たす破目になった。編集者といわれるもののそれは一つの役割でもあった。

いうまでもなく、花田さんは戦争中、『復興期の精神』に収められたエッセイで明らかのように、西欧のルネッサンスについて語りながら二十世紀の日本の現実の姿を語るといって、「少々しゃれた仕事」（初版跋）をして官憲の目をくらませていたが、戦後は、「インターナショナルな眼でナショナルな題材を料理する」と称して、もっぱら日本の歴史上の転形期に着目し、そのすぐれた成果は最晩年の『日本のルネッサンス人』（一九七四年五月・朝日新聞社）に至る諸著作に結実したが、それらの過程で、わたしの知る限り、もっとも“たより”にしたのが、廣末さんであった。会うたびに廣末さんの書いたものに触れ、その消息を聞き、「廣末さんは何しろ勉強しているからねえ」と、あれだけ勉強していた花田さんが感嘆を

惜しまなかったが、それはむしろ、両者が、「前近代の可能性」を未来の芸術運動のなかにいかにとりこむかという共通した主題に、分野は異にしても思いを馳せていたからにはかならない。

そのものズバリ、廣末さんの『前近代の可能性』（一九六〇年二月）を刊行するや、花田さんは、いち早く書評を書いた。花田さんは、例によって「廣末保をアカデミシャンにしておくには、もったいない人物」と、暗に「国文学」界に憎まれ口を叩いてから、「うしろをふりかえっているようにみえるにもかかわらず、あくまで前を向いて、前人未踏の領域を開拓しようという意欲にもえただけである」廣末さんに脱帽し、この本では「これからの文学の移行形態が伝統を否定的媒介にして、みごとにとらえられている」と絶讃したのである。「往復運動」者、もって冥すべしであった。

ところで、廣末さんは、仕事の打合わせなどで会う時、ほとんどの場合、「意欲にもえただけ」どころか、どこからだが不調だったり眠れなかったり、なんとなく世をはかなんでいるかのようになり意気消沈してまず登場する。そして対話者との話がはずむに従って次第に、肉体的苦痛などどこ吹く風、「意欲」の片鱗をみせはじめののだが、ごく稀に、待合わせ場所に猛然と、「意欲」の火の玉となって飛び込んでくることもある。その後者の例が、『絵金——幕末土佐の芝居絵』（一九六八年七月刊）の時であった。喫茶店の片隅に坐るや否や、絵金の芝居絵のスライドをとり出し、この絵の素晴らしさが解らないようだったら、編集者などやめてしまった方がいいといわんばかりの「意欲」で、廣末さんは、画集刊行について話をはじめたのである。廣末さんにそういわれたらあとにはひけな

い、貧乏会社で金のかかるカラーの画集が刊行できるかどうか、頭の痛いことだったが、えいままよ、それは土佐での芝居絵撮影の珍道中を経て、やがて画期的な一冊となって世に出たのである。

廣末さんから一編集者として学んだことは数限りないが、それは出版にだけ限ることではなかった。一九六四年七月、その頃ある劇団の文芸部にも所属していたわたしは、もともと人形劇の台本として書かれた廣末さんの戯曲『新版四谷怪談』上演に一制作者としてかわったのである。すでにその劇団は、花田さんの『爆裂弾記』（一九六三年一月〜二月）を上演していて、舞台をとおして花田さんと廣末さんはそれぞれの「意欲」を交流させてもいた。電車の吊り皮に廣末さんもわたしもぶらさがったの立話だったと思う、上演の申しこみをしたのだった。もともと疑い深い(?)廣末さんは、半信半疑だったが、それからの上演に向けてのさまざまな局面は、いわば廣末理論の舞台的実践のあらわれであった。むしろ、舞台的成果には、廣末さんも花田さんも、どうやら失望の色をかくせない面持だったが、それから二十年、廣末さんは『四谷怪談』（一九八四年五月・岩波新書）を著わしたのである。その「朝日新聞」での書評の見出しは『「南北劇」を紙上で演出』とあった。つまりわたしたちが寄ってたかって上演した「南北劇」を、二十年を経て紙上でやりかえしてみせたのである。なんという「悪意のエネルギー」に満ちた「復讐劇」であろうか。

日本の古代文学については、わたしはひたすら西郷信綱さんに学んでいるが、近世文学については、廣末さん一辺倒である。いや、廣末さんの本や話からこっそり頂戴したものでしか、近世文学を知

らないのである。頂戴したものといえ、かつての一時期近隣同士だったことがあり、廣末家引越しのさい、廣末夫人からわたしの女房は洋服だんすやら三面鏡を頂戴したものである。一方的に頂戴するばかりだが、もっとも三面鏡は、わたしの積み上げる本が占領して、いまや、開かずの鏡となっている。